

英語通訳ガイド資格課程創設に関する基礎的研究報告その3

山田健太郎, 山内ひさ子, 松尾晋一, 岩崎義則 (九州大学)

Report on Preliminary Research for English Tour Guide Program, Part 3

Kentaro Yamada, Hisako Yamauchi, Shinichi Matsuo and Yoshinori Iwasaki (Kyushu University)

はじめに

国際交流学科は、中期目標に掲げる英語強化に向けて、平成17年度からTOEICスコアに準拠した英語科目群コース・オブ・スタディ、平成18年度より学芸員資格課程の新設と、実践的な教育を目指したカリキュラム編成を心がけてきた。さらに平成17年度からは、年間計画として、「国際観光ガイド課程創設」の検討を掲げてきた。

このような流れの中で、平成17年度から、地域の特性と国際交流学科の個性を有機的に活用する実践的な教育の具体的なプログラムとして、長崎県地域限定通訳案内士（英語）の資格に対応するカリキュラムを創設するための基礎的な研究を、教育研究高度化推進費Bの交付を受けて行ってきた。本報告書は、平成20年度の研究の報告である。

先行研究も先例もない教育プログラムの創設、さらに地域社会のニーズに結びついたものとする必要性から、パイロット・プログラムに基づく考察が必須であり、また同時に地域の関連する団体等との連携の模索も必要となる。そのような観点から、本研究では、1. 「長崎通訳ガイド研究会」の活動を通じたプログラム内容の検討、2. 長崎県観光振興推進本部・長崎県通訳案内士協会との協力、3. 通訳案内士資格試験問題（英語）の検討を柱とした。

1. 「長崎通訳ガイド研究会」の活動

平成20年度の「長崎通訳ガイド研究会」参加学生は11名。主な活動内容は、1) 英語ガイド学習、2) 島原観光地研修、3) 観光船歓迎イベント見学とボランティア案内体験であった。これらに加えて、後半からは、日本文化についての知識と英語力強化をめざして、勉強会を週に1回ペースで行った。これらの活動を通じて、通訳ガイドに関する授業の基礎となる学習指導について考察を行った。

1) 英語ガイド学習

グループごとにコースプランを作成（長崎国際観光コンベンション協会によるホームページ『長崎さるく』より「さるくコースマップ」を参考にした）し、3段階に区切って、発表スケジュールを策定した。コースは、a) 諏訪神社、b) 26聖人と大浦天主堂、c) グラバー園を選定した。各グループは3名から4名の構成となった。

第1段階は、コースの歴史背景と主な見所についてのプレゼンテーションを英語で作成し発表させた。

第2段階は、各グループが、プレゼンテーションの内容をガイド案内形式のスク립トにし、教室内に写真を貼るなどして観光ポイントを設定し、他グループ学生や教員を相手にシミュレーション練習を行った。

第3段階は、シミュレーションのスク립トを発展させて所要時間2時間程度のコースプランを作成し、英語圏のゲストを招聘して、実際の観光コースを歩くガイド実地練習を行った。

考察：各段階の発表内容の評価と学生の反省内容から、以下の結論を得た。

研究に参加した学生は、1年生がほとんどであり、長崎学関連授業の履修状況は、個人ごとにかなり異なるため、長崎観光の基礎知識が不足している場合がかなりあった。また観光コース個別のガイドに必要な知識は、それらの授業で教えられる知識からさらに踏み込んだものとなる場合がある。そのため、プレゼンテーションの調べ物にかんがりの労力が必要であったようだ。ただし、一方では学芸員の資格課程を履修する学生もおり、国際交流学科のカリキュラムと通訳ガイド関連の学習との関連性は高いと言える。

語学力についても、学生にかんがり個人差があった（TOEIC900点レベルから500点レベルまでが混在）。そのため、発表において、説明内容やその英語にかんがりの優劣が見られた。しかしながら、第3段階まで進んだ学生は、スク립トの仕上げ過程で英語表現力も向上し、わかりやすい説明をすることができ、ゲストからは高い評価を得た。

また、勉強会を通じて、学生が神社や和食など、日本文化の基礎知識を学び、それらを英語で表現する際に必要な単語などを習得することで、通訳ガイド資格試験に合格するための準備となると同時に、実際のガイドの際の様々な質問に対応することができるようになることが観察された。

2) 島原観光地研修

本研究チームから山内教授、山田准教授、松尾講師と、研究会メンバーの学生4名で、3月24日と25日に、島原の観光地（島原素麺工場、原城跡、日野江城跡、雲仙岳災害記念館、島原城、武家屋敷、仁田峠、雲仙地獄）を巡見し、その観光的意義について学んだ。



同時に、観光ガイドの学習における、観光地研修という学習形態の効果について考察した。

参加学生には、事前学習として、研修で立ち寄る観光名所について調べ物をして簡単な資料を作成する課題を与えた。また、外国人観光客を案内することを想定した視点から考えるよう指示し、説明内容や展示内容の改善点や、長崎市内の観光と関連付けたコースプランを事後のレポートとして提出させた。

考察：実際に史跡や観光名所を巡りながら長崎の歴史・文化・産業を学ぶことは、実感を伴いながら深く理解することを可能にし、同時に空間の中で様々なことが関連付けられ、立体的に把握することができる。同時に、通訳ガイドとして不可欠な、実際に外国人観光客を案内する際に把握しておくべき現場の知識を学ぶ点でも、このような学習機会のもつ意義は大きい。さらには、学生の観光ルートプラン作成には、現実的でありながら斬新なアイデアもあり、地場産業と観光を同時に視野に入れる、フィールド・ワーク型の総合学習の1形態としても可能性があると考えられる。

3) 観光船歓迎イベント見学とボランティア案内体験

3月5日のクウィーン・ヴィクトリア号長崎入港を記念した長崎国際観光船受入委員会によるイベントを見学し、それに合わせて設置された浜の町商店街と長崎通訳案内士協会による観光案内所でのボランティア案内を体



験した。参加学生は、通訳ガイド研究会学生2名。山田准教授が同行した。体験学習終了後、学生から感想文を提出させた。

考察：外国語学習の動機付けとして、実社会の場面での外国の人とコミュニケーションが効果絶大であることは言うまでもない。その意味において、この体験学習はきわめて有益なものであった。今後企画を計画的に進め、簡単な事前指導を組み合わせることで、ある程度まとまった人数の学生を動員すれば、観光客案内所のサービスの充実など、インターンシップ的な学習の機会を学生に提供すると同時に、長崎の観光サービスの向上に大きな貢献をすることが可能である。

2. 長崎県観光振興推進本部・長崎通訳案内士協会との協力

長崎県観光振興推進本部および長崎通訳案内士協会との協力としては、1)意見交換会、2)「外国人観光客楽々まち歩き推進事業」への参加を行った。

1) 意見交換会

長崎県観光推進本部との意見交換会を開き、長崎県の観光政策の現状について情報を収集し、地域限定通訳案内士を中心とした事業の発展について意見を交換した。長崎県の地域限定通訳案内士を中心とした観光振興事業はまだ緒についたばかりで、手探りをしながら進んでいる状況であることが確認された。広報についての大学の援助、有料のツ

アーを利用する観光客を増やすためのプラン作成などが話し合われた。一方では、観光客の言語ごとの割合と、日本社会さらに長崎の教育状況における言語教育とのギャップや、短期的に中国語通訳ガイドとなりうる人材を集める方策などについても、上海外国語大学での広報など、意見が交わされた。

2) 「外国人観光客楽々まち歩き推進事業」への参加

長崎県の委託運営事業として(財)長崎地域経済研究所が開催した「外国人観光客楽々まち歩き推進事業」に、モニターとしてウィスコンシン大学オシュコシ校から長崎県立大学シーボルト校への留学生3名と松尾講師が参加した。体験プログラムの説明の後、長崎県通訳案内士協会の通訳ガイドの案内で、中通り商店街や青空市場を通りながら、料亭での和食、着物着付け、生け花などを体験した。外国人観光客に日本文化を実体験として紹介する利点とその際に生じる問題点、さらには長崎県通訳案内士協会を中心とした体制の持つ問題点など多くの知見を得た。

3. 平成20年度「長崎県地域限定通訳案内士試験」関連の研究

平成20年度「長崎県地域限定通訳案内士資格」試験関連の研究としては、1) 国家試験の通訳案内士試験と共通で行われた平成20年度試験外国語(英語)の分析、2) 上海外国語大学留学生の協力による公式テキスト『長崎学への道案内』と中国語も含めた外国語試験問題の検討を主なものとしてあげる。

1) 通訳案内士試験(英語)の分析

従来の国家試験の通訳案内士試験の問題傾向分析にあるように、以前に比べてかなり難問を排除するガイドラインのもとで作成されているが、問題で問われる英語力は、読解力の比重がもっとも高く、それに加えて、語法力と作文力が続く。ただし読解問題の英文は、

一つが講談社インターナショナル『英文日本小事典』の歌舞伎の説明文から、もう一つが『International Herald Tribune』紙の町屋についての記事からの出題となっており、日本文化の英文紹介を内容とする、通訳ガイドに必須の知識を範囲とする傾向がみられる。かつての問題に比べて、かなり読解問題の対策が組み立てやすくなりつつあるといえる。

2) 『長崎学への道案内』と試験問題の検討

中国人留学生の立場から「長崎県地域限定通訳案内士試験」の公式テキストと試験問題について意見を聴取した。以下がその主な点である。

- ・テキストについては、来日前の長崎についての印象の中で大きいものであった、原爆や平和公園、グラバー園、蝶々夫人、出島について、やや情報が不足している。また地理や特産物については、より記憶しやすい構成にし、索引などで情報を見つけやすくする工夫があると良い。
- ・英語の試験問題は特に難しいと思わない。中国の高校レベルより下だと考える。また中国語の試験問題は、書き言葉が多く、実際の通訳の場面で役立つ表現とのずれがあると思う。
- ・試験制度について、さらに明確な広報があるといいと考える。

なお、ここで議論した内容に関しては、長崎県観光振興推進本部に紹介した。成果の一

部は、テキスト改訂時に参考にしていただいた。

まとめ

本研究は、英語通訳ガイド資格課程創設に向けてこれまで継続してきた成果の上に、教育的効果と方法に関する知見、カリキュラム創設の際に必要な地域との連携の土台づくり、さらに通訳案内士試験、特に英語の分析を積み上げることができた。プログラムを実行可能なものと仕上げる上で、今後の課題としては、以下のことが挙げられる。まず、長崎通訳ガイド研究会では、学生がそれぞれの英語力と目的意識に合わせた勉強をしているが、これを授業として集中的に効率よく学習させるものにするには、教材や教育方法についてさらに研究が必要と思われる。特に実習プログラムの具体的な内容については、県外の通訳ガイド研修プログラムをもつ団体などと協力しながら具体案を練り上げることが望ましいと思われる。また、カリキュラムにより広い汎用性を持たせるための地域のニーズの調査と地域との協力体制構築については、現段階ではまだほんの初期的な段階であり、今後の努力が必要である。

付記：本研究は、平成20年度長崎県立大学シーボルト校「教育研究高度化推進費B」の交付を受けて行われた。